

「基本漢字」の選定

漢字学習研究グループ

加 納 千恵子・清 水 百 合
竹 中 弘 子・石 井 恵理子

1. はじめに

外国人が日本語を学習する際、助詞や敬語などと並んで最も難しいとされるものの一つに漢字がある。特に、非漢字系の学習者の立場から見ると、①字形の複雑さ②膨大な数③多読性（音との対応が1対1でないこと）④多義性（意味が一通りでない漢字があること。たとえば、「安」には、“safe”と“cheap”という二つの意味があり、それらの関係が分かりにくい）などがその難しさの理由と言われている。

①③④の点に関しては、漢字というものの自体の性質や用法を変えることができない以上、何とか外国人に理解されやすく効果的な教授法を工夫する以外ないであろう。しかし、②の点に関しては、学習者が目標とする日本語の習得に必要な最低限の漢字（あとで「基本漢字」として定義する）を設定することによって、ある程度解決をはからなければならないのではないだろうか。

国立国語研究所の調査報告『現代新聞の漢字』によれば、3種の新聞のサンプリング調査で、延べ約100万字を構成する漢字の異なり字数は、約3,200字であるが、その上位500字までで全体の79.4%を占めるといふ。適切に選ばれた500字で日本語全体のかなりの部分をカバーできる可能性があるという武部良明氏の意見もある。¹⁾

では、「適切に選ばれた」漢字というのは、具体的にどのような漢字を指すのだろうか。また、日本語教育のための基本漢字というのは、単にある目標とする領域をカバーするのに必要最小限の数の頻度の高い漢字、というだけでいいのだろうか。日本語における漢字と語彙の体系を最も効果的に習得するための核を作るには、どのような漢字をいくつぐらい教えればいいのか。このような漢字の選定の問題は、日本語教師にとっても外国人学習者にとってもかなり切実な問題であるはずなのだが、残念ながらはっきりした統一見解はまだ出されていない。

筑波大学留学生教育センターの漢字学習研究グループ、加納、清水、竹中、石井の4名は、センターのAコース（5ヶ月間、約500時間の非漢字系学習者に対する初級集中日本語コース）の学生を対象とし、効果的な日本語習得のために初級外国人学習者に教えるべき基本漢字500字の選定を試み、漢字教材『基本漢字の練習Ⅰ・Ⅱ』合わせて45課を試作版として作成した。本稿では、同教材を作成する際に漢字の選定をめぐるさまざまな観点からなされた議論の経過をまとめるとともに、日本語教育のための「基本漢字」とはどうあるべきかを、検討する。

本稿の主要部分、「3. 基本漢字の選定」の部分は、漢字学習研究グループ4名の作業報告をまとめたものである。特に、3. 1に関しては加納、3. 2は清水、3. 3は竹中、3. 4は石井が

中心となって選定作業を行った。しかし、本稿中の「基本漢字」の用語をめぐる議論や今回の漢字選定に関する問題点・反省点などに関しては、あくまで加納の私見であることをお断りしておく。

2. 「基本漢字」という用語について

「基本漢字」という用語には、まだはっきり確立した定義があるわけではない。しかし、外国語教育において「基本語彙」と呼ばれているものをめぐるいくつかの議論があるので、それらを参考に考えてみたいと思う。

『日本語教育事典』によれば²⁾、基本語彙の選定方法は、客観的方法と主観的方法とに大別される。客観的方法は、語彙選定の基準を純粋に統計に求めるものであり、主観的方法は選定者の知識・経験に基づいて主観的な判断で行うものであるとされている。

林四郎氏は「語彙調査と基本語彙」(1971)の中で、それまで外国語教育において漠然とあいまいに使われていた「基本語彙」という用語を次の五つに分類し、整理しようとした。

- (1) 基礎語彙 意味の理論的分析によって求められた半人工的な語彙
- (2) 基本語彙 特定目的のための「○○基本語彙」
- (3) 基準語彙 標準的社会人としての生活に必要な語彙
- (4) 基調語彙 特定作品の基調を作るのに働く語彙
- (5) 基幹語彙 ある語集団の基幹部として存在する語彙

(1)の基礎語彙というのは、イギリスのオグデンらの提唱した Basic English のようなものであり、日本では英文学者土居光知が考案した『基礎日本語』などがある。外国語教育における基本語彙というのは、(2)のことである。(5)の基幹語彙は、ある語集団の語彙調査によって求められるものであり、その語が使用される分野の「広さ」(多方面にわたって使われているか、ある特定の分野だけに限られているか)と「深さ」(その語の出現頻度)から基幹度を判定し、基幹度の高いものを選定したものであるとされている。林氏は「基本語彙はきめられるか」(1975)の中で、新聞基幹語彙を基にして選定した教育基本語彙を発表している。すなわち、林氏のいう基本語彙とは、語彙調査の結果から客観的に出された基幹語彙を基に、ある特定の目的のために主観的あるいは経験的に選んだものといえよう。

さて、林氏の「基本語彙」の考え方を漢字の場合に置き換えてみると、日本語教育のための「基本漢字」というのは、漢字の使用頻度調査などの結果から客観的に選んだ「基幹漢字」を基に日本語教師が主観的あるいは経験的に選ぶもの、ということになるだろう。

しかし、ここで考えなければならないのは、語彙を教える場合と漢字を教える場合の根本的な違いである。語彙というのは、音と意味、そして読み書きの際には表記との連合として習得されるもので、さらにその語彙が連合して文を作る際の用法とともに記憶されなければならない。この語彙習得のシステムは他の外国語教育の場合にも同様である。しかし、漢字の場合は、表意文字あるいは表語文字という表記のシステムそのものが外国人にとっては分かりにくい。ほとんどの言語の表

記システムは、表音文字によるものだからである。つまり、まず漢字とはどういう表記システムに用いられるものであるか、という表意・表語文字の概念の導入から始めなければ、効率的漢字教育はできないのではないと思われる。そのように考えると、日本語教育のための「基本漢字」の中には、漢字という文字の概念を導入するために必要な漢字も含まれるべきではないだろうか。

また、漢字はあくまで語彙を表記するために使われるものであるから、漢字そのものの使用頻度ばかりでなく、その漢字が含まれる語が日本語の体系において核となるような語彙（「基礎語彙」）であるかどうか重要な意味を持ってくるだろう。そこで、我々は、日本語教育のための「基本漢字」を、漢字そのものの使用頻度が高いものであるとともに、体系的な漢字教育上必要なものであること、日本語の基礎語彙を表す漢字であることなどの基準で経験的に選ばれるべきものと考えたいと思う。

3. 基本漢字の選定

初級日本語教育のための「基本漢字」を選定するにあたっては、まず初級で教えられるべき漢字数を決めなければならない。現在使用されている数多くの初級日本語教科書の中からいくつか代表的なものを選んで、そこで教えられる漢字数について見てみよう。³⁾

- 大阪外国語大学留学生別科 'Basic Japanese; Intensive Course for Speaking and Reading Vol. 1, Vol. 2' (1967) 約2,500語, 466字
- 国際学友会日本語学校『日本語読本一』(1957) 1,600語, 300字
- 国際基督教大学 'Modern Japanese for University Students, Part 1' (1970) 1,250語, 400字
- ランゲージ・サービス社 'Intensive Course in Japanese ; Elementary Part1, Part2' (1971) 約2,100語, 302字
- 東京外国語大学付属日本語学校『日本語1』(1973) 約1,500語, 350字
- 早稲田大学語学教育研究所『外国学生用日本語教科書・初級』(1972) 約2,000語, 約700字

こうして見ると、初級日本語教育の時間数(200~400時間)から考えて、300~500字というところが平均のようである。前述の国立国語研究所の調査結果の使用頻度上位500字というのを考えあわせ、初級基本漢字としては、500字ぐらいが適当であろうと思われる。

次に、「基本漢字」の選定法としては、各日本語教科書で使われる漢字の使用頻度を調査し、頻度の高い漢字を採用するという方法も考えられる。しかし、初級教科書で使われている語彙が、多くの場合、教室での会話やある場面での会話に使われる語彙であったり、文型を教える練習のための語彙であったりすることを考えると、そこで使用頻度の高い漢字というのは、会話や文型練習でよく使われる言葉を漢字で表記したものにすぎないとも考えられる。たとえば、初級の会話では、「つくえ」という言葉が必ず出てくるが、「机」という漢字の日常生活における使用頻度というのは、それほど高くない。⁴⁾

そもそも、日本語教育のための「基本漢字」を定めるというからには、日本人向けの新聞や雑誌

での使用頻度ばかりでなく、外国人学生が日常目にするであろう頻度の高い漢字の調査をすることが急務である。しかし、今回は時間的制約もあり、学習研究社の『あたらしい漢字用法辞典』での順位、レベルによって漢字の使用頻度を見ることにする。⁵⁾ それに、漢字教育上の必要性和「基礎語彙」の漢字を考慮に入れ、次の4つの方法で「基本漢字」を選定することにした。

(1) 漢字というものの成立ちを教えるための漢字を選ぶ。

(2) 漢字の字形の構成要素となっている漢字(部首)を選ぶ。

(3) 日本語の語彙体系、文法体系を習得するために必要な「基礎語彙」に使われる漢字(特に、形容詞・動詞)を選ぶ。

(4) 日常生活において使用頻度が高く、使用範囲が広い漢字を選ぶ。

3. 1 漢字の成立ちを教えるための漢字

漢字が表意・表語文字であることを外国人に理解させるためには、まず漢字の象形性を説明しなければなるまい。漢字は音ばかりでなくそれ自身で意味をも表す文字であることを理解させるために、象形文字、指事文字と呼ばれるものの中から、①字形がそれほど複雑でないこと、②意味が分かりやすいこと、しかも③それほど使用頻度が低くないことを基準に、以下の50字を選び、具体的なものを表している漢字を絵文字、より抽象的な意味を記号化していると考えられるものを記号文字として提示することにした⁷⁾。

絵文字： 日 月 火 水 木 金 土 山 川 田

目 口 耳 手 足 人 女 子 車 門

魚 鳥 馬 牛 貝 米 糸 竹 石 雨

記号文字： 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

上 下 中 大 小 本 力 円 半 主

たとえば、「耳」「魚」「鳥」「馬」「牛」「貝」「糸」「竹」「雨」などの漢字は、それ自体はそれほどよく使われる漢字ではない⁶⁾が、①②の基準をみたしている上に、他の漢字の構成要素としてよく使われることから、「基本漢字」に入れた。

次に、漢字が意味と意味の連合でできていることを説明するのに理解しやすい漢字として以下の13字を選んだ。

明 休 体 好 男 林 森 間 聞 東

分 岩 畑

いわゆる字源的に「会意文字」といわれているものでも、構成要素となっている漢字を知らなかったり、漢字の意味が抽象的で分かりにくかったりすると、初心者向けの説明には適当でない。「岩」や「畑」は、それほど使用頻度の高い漢字ではないが、やさしい象形文字の組合わせでできており、漢字の成立ちを教えるために都合がいいので採用した。

ここでは、漢字の成立ちを教えるために採用された63字を小学校1年生の子供がはじめて習う教

育漢字76字と比べてみよう。

〔第1学年配当漢字〕76字

一右雨円王音下火花学 気九休金空月犬見五口 校左三山子四糸字耳七
車手十出女小上森人水 正生青夕石赤千川先早 足村大男中虫町天田土
二日入年白八百文木本 名目立力林六

「基本漢字」として選んだ63字のうち、小学校の第1学年で教えられる漢字に入っていないものは、次の19字ある。()に配当学年数を示したが、「好」を除いては、第2学年か第3学年で教えられることになっている。

門(2) 魚(2) 鳥(2) 馬(2) 牛(2)
貝(2) 米(2) 竹(2) 半(2) 主(3)
明(2) 体(2) 好(6) 間(2) 聞(2)
東(2) 分(2) 畑(3) 岩(3)

反対に、小学校第1学年では教えられるが、この63字に入っていない漢字というのが以下の30字であるが、このうち絵文字・記号文字・組合わせ文字に当たるものは16字のみである。

絵文字：王 犬 虫 文 夕 白 赤 青 正 生 立

記号文字：出 入 音

組合わせ：名 先

それ以外：右 左 年 百 千 見 早 学 校 空 天 気 村 町

漢字の象形性や指事性を説明するために意味がはっきりして分かりやすいのは、何といてもものの名前(名詞)に使われる漢字である。従って、形容詞や動詞の漢字(白・赤・青・正・生・立・出・入)は、あとで(3)の基準で採用することにした。名詞の漢字であっても、「文」「夕」「音」「名」「先」などは意味が抽象的で、初めて説明するには分かりにくいので、ここでは入れなかったが、あとで基礎語彙を表す漢字として検討する。

小学校第1学年の配当漢字で最終的に選んだ500字の基本漢字に入っていないものは、「王」「犬」「虫」の3字だけである。⁸⁾

3. 2 漢字の構成要素(部首)として使われる漢字

効果的な日本語習得のための「基本漢字」というのは、単にその500字さえ覚えれば十分であるという意味ではない。そこからさらに、中級・上級へと進むために、その土台となる500字でなければならぬ。そのためには、より複雑な漢字の構成要素となっている漢字を初級段階で覚えておくことが将来の助けとなるはずである。すなわち、漢字の部首として使われる漢字のうち、多くの

漢字、あるいは使用頻度の高い漢字の構成要素となっているものを選ぶことにした。

『あたらしい漢字用法辞典』のレベル5までの1,000字と教育漢字を部首別に分け、漢字数が4字以上ある部首を選ぶと、次の60になった。¹⁰⁾

へ ん : イ 扌 言 糸 木 シ イ 卩 禾 土
金 月 日 女 ネ 卩 石 馬 火 車
方 弓
つくり : リ 女 頁 反 力 欠 隹 寺 青 見
卩 斤 月
かんむり : 宀 艹 竹 人 羊 車 穴 艹 一 艹
あ し : 心 貝 皿 九 皿 示
た れ : 广 尸 疒 尸
によ う : 讠
か ま え : 口 門 冂

以上の部首のうち、単漢字として使えるものは30字あり、その中から(1)の基準で選んだ漢字を除くと、次の13字になる。

言 方 弓 頁 反 欠 寺 青 見 斤 穴 心 皿

しかし、「弓」「頁」「斤」「穴」「皿」は単漢字としての使用頻度が低いため、基本漢字としては採らなかったもので、残りは8字である。

さらに、前述の60の部首に、さらに(1)の基準で選んだ漢字の中から部首となるものを加え、それぞれについて『あたらしい漢字用法辞典』の使用頻度500位までの漢字リストを作成した。¹¹⁾これを基本漢字を選定するための候補漢字のリストとし、3. 3, 3. 4で検討する際の参考資料とする。

〈基本漢字のための部首別候補漢字リスト〉

へ ん : イ=代 作 化 体 保 信 価 使 側 住
付 係 佐 件 任 備 値 他 億 仕
働 優 供 何 位 伝 (休)
扌=打 持 指 投 提 技
言=議 調 話 記 設 計 論 語 談 説
認 試 評 証 討 読
糸=経 約 総 結 組 続 統 線 終 編
木=相 機 校 村 松 株 権 橋 横 格
検 林 構 様 (森)

ゝ=決 法 海 治 活 演 濟 派 流 消

洋 沢 浜 注 港

ゝ=行 後 術 役 得 待 衛

ㄣ=院 階 際 防 阪 隊 限

禾=和 利 私 科 税 種

ㄣ=場 地 増

金=銀 鉄 録

月=勝

日=時 明 映 昨

女=好 始 婦

ネ=社 神 福

ㄣ=性 情

石=確 研 破

馬=馱 駿

火=爆 (畑)

車=転 輸

方=放 施

弓=強 引 張

王=現 理 球

牛=物 特

つくり : リ=制 利 別 判 割 劇

女=政 教 数 改 故

頁=題 領 頭

反=阪

力=動 助

欠=次 歌

隹=進 難 雄

寺=時 特 持 待

青=なし

見=親 観 規

ㄣ=部 都 郎

斤=新 所 近 断

月=明 期 朝

口=和 加 知

かんむり：宀=定 家 実 安 官 宅 審 宿 宮 室

容 害 完

艸=藤 若 落 葉 藏 英

竹=第 策 算 答

人=会 合 全 金 今 食 命 企

羊=義 美 着

雨=電

宀=空 究

夕=者 考

宀=京 高 市 交 夜 變 商

艸=学 營

艸=党 常

あ し：心=意 思 急 感 想 態 念

貝=貝 資 買 費 質 負

灬=点 無 黑 然

見=見 売 先 元 光

皿=なし

木=集 案 樂 条

日=者 書 音 春

月=育 有 青

口=名 各 台 告 古 吉

女=要 安 委

た れ：广=度 府 店 広 席 座 応 庁

尸=局 屋 展

疒=病

厂=原

によ う：辶=通 連 選 近 道 進 運 送 込 追

過 週 造 違

か ま え：口=国 回 団 園

門=間 問 開 関 聞 閣

冂=円 同 内

3. 3 語彙・文法要素として必要な漢字

漢字学習は、漢字そのものの使い方を覚えることを最終目的とするわけではない。その漢字が単

語を形成し、さらにその単語が使われている文がわかるようになることが最終目的なのである。したがって、日本語の体系を習得するための核となるような語彙に使われている漢字を学習することが読み書き能力の基礎となるはずである。その意味では、使用頻度のみを問題とする「基幹語彙」を検討するだけでは不十分で、いわゆる「基礎語彙」の視点も必要であろう。

たとえば、仮に語彙調査の結果、「兄」と「弟」の使用頻度が高く、「姉」と「妹」の使用頻度がそれほど高くないからといって、前者2つのみを基本語彙として採用し、後者を採用しないということになると、体系としてのバランスを欠くことになる。漢字の場合も同じである。「春」(461位)、「夏」(580位)、「秋」(540位)、「冬」(903位)のうち、「冬」だけが使用頻度が低いからといって体系からははずすことはできない。

また、新聞や雑誌での使用頻度はそれほど高くなくても、日本語の基礎語彙と考えられる漢字は教えておかなければならないと思われる。たとえば、前述の「兄・弟・姉・妹」は基礎語彙としては欠かすことのできないものであると考えられるが、漢字の使用頻度は、「兄」(1,049位)、「弟」(1,090位)、「姉」(1,329位)、「妹」(1,204位)とあまり高くない。しかし、これらの語が文中で使われる場合に、ひらがなで書かれてよいものであろうか。

上述のような立場から、日本語の基礎語彙として重要と思われる形容詞・動詞などを検討してみたい。オグデンの Basic English の場合には、850語の中に基本的動作を表すための Operation と呼ばれる100語があるが、いわゆる動詞は16しか含まれていない。¹²⁾ が、26余りの前置詞との組み合わせによって、実は、4,000近い動作を表すことができるといわれている。しかし、日本語の場合には、相当数の基本動詞が必要であろう。形容詞に当たるものは、Basic English には、Qualities として150語が登録されている。

動詞・形容詞に使われる漢字を教えることは「送りがな」というもののシステムを教えることでもあり、又音読みと訓読みのルールを教えるのにも便利である。「動く」と「動物」、「新しい」と「新聞」などのように、漢字の表す意味が同じでも、読み方が違うということは、漢字という表記法の重要な点であり、早い時期に教えられなければならない。

そこで、日本語教育の初級における基本動詞として、『997語で読める日本語』¹³⁾ で選ばれている動詞198語を検討し、敬語動詞などを除いた150語を考えることにした。以下にその動詞の一覧を示す。

1. 移動を表す動詞 [N₁ガN₂へ／ニV i] (18)

[N₁ガN₂ヲV i]

行く 来る 帰る 動く 進む 止まる 入る 出る 乗る 降りる 着く 向かう

歩く 走る 通る 渡る 泳ぐ 飛ぶ

2. 生活における基本的動作を表す動詞 (17)

[N₁ガV i]

起きる 寝る 立つ 座る 働く 休む 遊ぶ

〔N₁がN₂ヲV t〕

食べる 飲む 見る 聞く 話す 読む 書く 作る 着る 脱ぐ

3. いろいろな動作を表す動詞 (25)

〔N₁がN₂ヲV t〕

押す 引く 持つ 投げる 打つ 置く 取る 使う 払う 洗う 歌う かける

〔N₁がN₂ニN₃ヲV t〕

送る 受け取る 教える 習う 貸す 借りる 返す 売る 買う 見せる あげる
もらう くれる

4. 変化を表す動詞 (自・他の対応がある) (52)

〔N₁がN₂ヲV t〕

〔 N₂がV i 〕

開	ける	閉	める	始	める	終	える	焼	く	折	る	切	る
	く		まる		まる		わる		ける		れる		れる
割	る	分	ける	消	す	つ	ける	回	す	曲	げる	並	べる
	れる		かれる		える		く		る		がる		ぶ
集	める	合	わせる	変	える	代	える	建	てる	残	す	続	ける
	まる		う		わる		わる		つ		る		く
落	とす	流	す	上	がる	下	がる	入	れる	出	す		
	ちる		れる		げる		げる		る		る		

5. 知覚・思考・伝達の動詞 (16)

思う 考える 知る 分かる 感じる 覚える 忘れる 選ぶ 調べる 比べる 決める
願う 言う 聞く 答える 伝える

6. 感情を表す動詞 (7)

笑う 泣く 喜ぶ 悲しむ 驚く 困る 疲れる

7. その他 (15)

ある いる 住む 泊まる 急ぐ 過ぎる 違う 晴れる 降る 数える 会う 別れる
待つ 訪ねる 呼ぶ

以上の150の動詞に使われている漢字は、次の104字である。¹⁴⁾

行 来 帰 動 進 止 入 出 乗 降 着 向 歩 走 通 渡 泳 飛 起 寝
立 座 働 (休) 遊 食 飲 (見) (聞) 話 読 書 作 脱 押 引 持 投 打 置
取 使 払 洗 歌 送 受 教 習 貸 借 返 売 買 開 閉 始 終 焼 折
切 割 (分) 消 回 曲 並 集 合 変 代 建 残 続 落 流 (上) (下) 思 考
知 感 覚 忘 選 調 比 決 願 (言) 答 伝 笑 泣 喜 悲 驚 困 疲 住
泊 急 過 違 晴 数 会 別 待 訪 呼

次に、『997語』にある100語の形容詞を参考にして、以下の基本形容詞の漢字66字を選んだ。

一イ形容詞：

(大)(小) 多 少 高 低 安 新 古 美 (明) 暗 重 軽 長 短 太 細 広 狭
強 弱 近 遠 良 悪 速 早 遅 正 熱 冷 暑 寒 暖 温 涼 若 忙 難
楽 苦 (悲) 痛 眠 白 黒 赤 (青) 深

一ナ形容詞：

(好) 静 元 気 有 名 親 (切) 便 利 必 要 適 当 簡 単 無 理 得 意
(残) 念 自 由

また、1字で名詞として使える漢字の中で、人、体の部分、時、天気、位置関係などを表すものとして基本的と思われるものを66字選んだ。

人：私 彼 友 客 父 母 兄 弟 姉 妹 夫 妻
体：頭 顔 (目) (耳) (口) 歯 (手) (足) 指
時：朝 昼 晩 夜 夕 春 夏 秋 冬
自然：(雨) 雪 風 雲 空
位置：右 左 (上) (下) (中) 外 前 後 横 奥 次 (東) 西 南 北
その他：国 家 宅 店 駅 橋 道 海 島 窓 形 色 音 点 (魚) 肉 飯 (水)
茶 酒 油 薬 品 物 紙 花 服 何

3. 4 使用頻度と造語性

3. 3で候補に上げた漢字を『あたらしい漢字用法辞典』で使用頻度と使用範囲の面から検討した。動詞の漢字では、次のものが1,000位以上となり、問題になった。

泳 1198 寝 1079 閉 1143 忘 1095 泣 1192 悲 1032 驚 1107 泊 1242

検討の結果、「泳」「泣」は、部首『氵』,「忘」「悲」は、部首『心』の意味の説明に便利なことから採ることにした。「閉」は、「開」(80位)と,「寝」は「起」(443位)との対で,「泊」は旅行のパンフレットなどで「二泊三日」などとよく使われるので目にする機会が多いであろうことから、採ると決めた。「驚」に関しては、意見が分かれたが、今回は基本漢字に入れることにした。

形容詞の漢字で問題になったのは、次の8字である。

暗 1044 狭 1370 暑 1254 寒 1195 暖 1164 涼 1490 忙 1371 眠 1298

特に、「忙」や「眠」のような対にならないもの,「暑」「寒」「暖」「涼」のように単漢字としての用法以外にあまり使われないものに関しては意見が分かれたが、今回は全部採用することにした。

名詞となる単漢字では、次のような字が問題となったが、結局全部採ることにした。

兄 1049 弟 1090 姉 1329 妹 1204 晩 1175 雲 1124 飯 1083

さて、ここまで基本漢字として選定されたものは、(1)の基準で63字、(2)の部首で8字、(3)の動詞104字、形容詞66字、名詞66字の計307字である。主に単漢字としての必要性・重要性

から選んできたわけであるが、さらに漢字が他の漢字とともに語を形成する際の造語力について考えてみたい。

漢字の造語力、使用範囲から、接頭辞・接尾辞的用法のある漢字を考えた。

先	今	(来)	毎	全	最	第	非	不	(無)
201	146		396	57	121	76	491	134	
両	以	一	曜	(一)	週	(一)	年	一	千
281	157	時	514		438		3	73	79
一	一	(一)	(一)	一	一	一	一	一	一
96	83	人	本	台	個	番	号	階	位
				216	565	323	368	253	482
一	一	一	一	一	一	一	一	一	(一)
531	274	屋	室	所	館	局	員	者	家
			421	107	319	194	47	22	
(一)	一	一	一	一	一	一	一	一	一
手	業	的	性	化	県	府	都	市	区
	54	39	199	100	195	156	92	78	67
一	一	一	一	一	一				
町	村	用	機	線	様				
114	210	102	101	247	470				

48字

さらに、上記の漢字や既出の307字、3. 2の部首別リストで候補とした漢字などを使った熟語を作り、その中で初級日本語教科書によく使われているもの、外国人学習者にとって必要と思われるものを意味分野別にまとめて検討した結果、以下のような語が候補として残った。

熟語名詞をつくる漢字：

93字

(東)京	学 校	会 社	銀(行)	工 場	図(書館)	公 園	地(下)鉄
16	33 176	30	264	169 34	631	122 412	40 327
病 院	部(屋)	(時)計	荷(物)	(先)生	留(学生)	医(者)	記(者)
441 236	37	186	1020	29	824	555	147
(家)族	老(人)	写 真	映(画)	雜 誌	(美)術	(番)組	仕 事
599	788	489 278	234	812 950	299	189	397 32
英(語)	(教)育	經 済	政 治	歷 史	科(学)	交(通)	(事)故
449	250	135 288	50 181	692 563	350	200	455
(道)路	信(号)	特(急)	(空)港	試 験	面 接	問 題	書(類)
367	198	153	445	409 404	165 576	75 123	680
資 格	結 果	論 文	(分)野	(方)法	宿(題)	(文)字	辞(書)
230 334	163 277	267 136	85	145	406	612	868
(計)画	(意)味	情 報	関(心)	制(度)	(会)議	産(業)	商(業)
150	295	286 306	104	196	52	142	353
農(業)	費(用)	原(理)	直(接)	(最)初	効(果)	和 式	洋(式)
362	337	132	329	261	515	151 185	366
(人)々	(国)民	共 同	平(和)	(物)価	天(気)	午(前)	午(後)
174	70	159 23	143	202	364	98	
(道)具	(食)器						
513	483						

93字

使用頻度の面から問題になったのは、「荷」(1,020位)、「雑」(812位)、「誌」(950位)、であった。

スル動詞に使われる漢字： 52字

料(理) 212	旅(行) 566	運 転 179339	案 内 218 51	予 約 160137	(生) 活 203	勉 (強) 946	練 (習) 704
研 究 426427	(報) 告 320	説 (明) 307	表 現 124 82	実 (験) 89	準 備 547 321	質 (問) 369	相 談 66 303
(欠) 席 349	卒 (業) 738	増 加 298187	減 (少) 533	(比) 較 1236	(反) 対 55	賛 成 881 115	(決) 定 62
(出) 発 43	到 (着) 989	連 絡 87 958	移 (動) 715	放 (送) 282	注 (意) 437	(心) 配 304	電 (話) 125
退 (院) 613	期 (待) 119	(要) 求 332	失 礼 369983	(建) 設 164	完 (成) 487	(経) 営 348	(結) 婚 633
離 (婚) 641							

ここで問題になったのは、「較」(1,236位)のみである。

さて、本来なら単漢字としての使用頻度ばかりでなく、造語性とともいうようなもの(どれだけ多くの使用頻度の高い重要な語を形成するか)を測る基準がほしいところである¹⁵⁾。しかし、今回のところは、『あたらしい漢字用法辞典』にのっている語の数、それらの語の重要度などを選者の主観によって判断するしかなかった。

また、同辞典のレベル1の漢字(200字)でこの基本漢字に含まれないものは、以下の14字である。

戦 党 務 世 総 保 界 委 団 氏 各 解 軍 勝

新聞というメディアの性格上、頻度がどうしても高くなるが、日常生活においてはあまり必要のない漢字もある。しかし、「世」「界」や「各」(「各地」「各国」「各大学」など)、「解」(「理解」「分解」「解答」など)は、検討してよい漢字であったという気がする。

人名・地名などによく使われる漢字¹⁶⁾は、基本漢字500字の外で教えることにし、特に配慮はしなかった。地名の必要度は、学習者がどこに住んでいるかによって、かなり異なる可能性があるし、人名によく使われる漢字には「井」のように「井戸」「天井」ぐらいしか使われない特殊なものもあるからである。

4. 反省点と今後の課題

今回選んだ500字の内訳を見ると、次のようになっている。

- (1) 成り立ちによって選んだもの 63字
- (2) 部首となるもの 8字

(3) 基礎語彙として使われる単漢字 236字

(動詞104, 形容詞66, 名詞66)

(4) 使用頻度・造語性によって選んだもの 193字

(接辞48, 熟語名詞93, スル動詞52)

こうしてみると、(2) 部首の観点が見え弱く見えるが、実は、3. 2で作成した〈部首別候補漢字リスト〉は、(3)(4)の選出の際に、かなり参考にしてある。使用頻度がそれほど高くななくても、部首別の漢字数をそろえたり、部首を説明したりするために入れた字(「忙」「脱」「焼」「畑」「姉」「妹」「較」「飯」「短」「到」「折」「勉」「飲」「雑」「茶」「荷」「窓」「雪」「雲」「笑」「簡」「暑」「老」「悲」「忘」「妻」「歴」「疲」「痛」「困」「医」「肉」など)も多い。また、『997語』を基に日本語教師の主観によって選んだ動詞・形容詞・名詞に関しては、選者の中でも迷っている漢字があった。使用頻度といっても、たとえば500位の漢字と501位の漢字の間にそれほど大きな差があるわけではない。結局、最終判断は選者が下したわけであるが、漢字選定の各基準の割合をどのぐらいにするのが適当なのか、ある漢字は採り、ある漢字は落とす、という判断が果してこれで良かったのか、などの悔いは残る。また、熟語名詞やスル動詞を選ぶ際には、やはり当留学生教育センターの学生を対象に考えたため、大学院進学および研究活動に必要な語彙(「試験」「面接」「問題」「書類」「資格」「論文」「分野」「方法」「宿題」「研究」「報告」「実験」「質問」「相談」「欠席」「卒業」など)が多くなってしまった。「外国人大学生もしくは大学院生の日本語教育のための基本漢字」とすべきかもしれない。

しかし、「日本語教育のための基本漢字」というからには、「基本漢字」としての体裁を整え、理論化することばかりが大切なのではない。実際に、それを習った外国人学習者がしかなるべき教育効果をあげてこそ、意味ある選定だったと云えるのではないだろうか。漢字を習得することの目的が日本語で読み書きができるようになることである以上、この500字の基本漢字選定の評価は、今後の教育実践を通じてなされるべきであろうと思っている。その結果によってこの500字も見直し、修正していかねばなるまい。本稿の終わりに〔参考資料〕として、500字のリストと教育漢字との比較があるのでそれも参照していただきたい。

さて、今後細部の見直しをするに当たって考えなければならないことの一つは、外国人学習者の側から見た必要性の高い漢字の調査、ということであろう。今回の選定に際しては、フランス人留学生マリアニ・ミッシュル氏の協力で、外国人が日常よく見る町の看板や掲示などに使われている語・漢字を調べ、選定にも取り入れるよう配慮したつもりであるが、まだ部分的試みにすぎない。外国人学習者がせっかく苦勞して500字おぼえても、自分達が日常目にしているものが一向に読めるようにならない、というのでは、学習意欲が続かない恐れがある。出口の見えないトンネルに追い込まれるようなものだからである。今後、外国人学習者にとっての使用頻度・必要度といったものを調査する方法を考えていかなければならないとともに、常に学習者の学習意欲を高めるためのフィードバックも必要であろう。

もう一つは、学習者の側から見た必要度ではなく、日本語習得のための効率性を考えた必要度の問題である。単漢字そのものの基幹度ばかりでなく、音訓の機能、造語性（作られる語の数、それらの語の基幹度、日本語の論理体系から見た重要性など）を測る基準をどう定めればよいか、今後の課題である。

最後に、漢字教育の効果を上げるには、基本漢字を適切に選ぶことも必要であるが、それらをどのように学習者に提示し、教えていくかという教授法の問題も抜きにしては考えられない。漢字を導入していく順序、導入時期、復習の期間やサイクルなども、効率を考えて検討しなければならない。漢字教材やコンピュータを利用した漢字学習プログラムなどのあり方とともに今後も実践検討していきたい。また、基本漢字を習得した後、専門分野別基本漢字を選定する必要もあろう。

注1)『日本語教育事典』p.296参照。

2)『日本語教育事典』p.297参照。

3)国際交流基金の『日本語教科書ガイド』を参照

4)「机」は、学習研究社の『あたらしい漢字用法辞典』では、使用頻度順位が1,610番（レベル9）と低くなっている。

5)学習研究社の『あたらしい漢字用法辞典』では、国立国語研究所（1962）『現代雑誌九十種の用語用字』秀英出版同研究所（1976）『現代新聞の漢字』秀英出版、などを参考に、漢字2,000字（常用漢字と人名・地名の漢字）を使用頻度によって10のレベルに分け、頻度の高い順に漢字を並べている。本稿で漢字の使用頻度を検討するにあたっては、この辞典での順位としレベル分けを参考にした。

6)『あたらしい漢字用法辞典』での順位は、以下のとおりである。

「耳」	1,323位	「貝」	1,590位
「魚」	1,008位	「糸」	699位
「鳥」	932位	「竹」	719位
「馬」	512位	「雨」	655位
「牛」	909位		

7)角川の漢和辞典によれば、「上」「下」「中」「大」「小」は指事文字であるが、「力」「主」は象形文字、「円」「半」は形声文字、「本」は会意文字であるとされている。しかし、外国人学習者にとっては、いずれも抽象的意味を表す単純な記号の形であるとした方が分かりやすいと認められるため、具体的な絵文字と区別して、記号文字としてひとまとめにした。

8)「犬」は、1,295位、「虫」は、1,073位。「王」は499位で日本では単漢字としてはあまり使われない言葉であるが、部首となる漢字でもあり、他の国では使用頻度が高いことも考えられるため検討を要するだろう。

9)「弓」は、1,539位、「頁」は、1,472位、「斤」は、常用漢字外、「穴」は1,201位、「皿」は、

1,651位である。

10) 60の部首は、それを持つ漢字の(レベル5までの1,000字と教育漢字)の数が多い順に並べたものである。

11) 漢字は使用頻度の順位が高い順に並べてある。先に基準(1)によって選ばれた漢字は、1位～500位までに入っていない()内に示した。

12) C.K.Ogden は、1929年に500語から成るBasic English 案を発表し、後に増補して、1932年には850語とした。Basic English に含まれる動詞16は、be, do, have, make, let, put, take, keep, get, come, go, give, say, see, seem, send である。

13) 参考文献7を参照。この997語は、以下のような手順で選定されたものである。

国立国語研究所『日本語基本語彙七種比較対照表』にある7種の基本語彙すべてに共通する語(278語)と7種の中では少し異質な樺島・吉田両氏の選定したもの以外の6種すべてに共通する語(422語)、計700語を採る。次に、その中から、8種の初級日本語教科書のうち4種以上に使用されているものを選ぶ。さらに、700語には含まれていないが、初級教科書の5種以上に使われている語を検討の上、採る。最後に、同じような意味を表す2語がある場合は、その一方を落とした(例、「ミルク」と「牛乳」)、語彙体系のアンバランスを補ったりした結果、997語を選定した。品詞別の内訳は、動詞198語、形容詞100語、名詞478語、文法・文型語(助詞・助動詞など)117語、その他(副詞・接続詞など)104語である。

14) ()の漢字は、すべて(1)(2)の基準で選ばれた71字に入っている()なので、数えない。

15) 参考文献5で、海保らは、漢字の「機能度」という概念を提示し、機能を指数化する試みを行った。そこでは、漢字の機能度を①よく使われること(使用率、熟知度など)②造語力があること(熟語数、音主率、具体性など)③おぼえ易いこと(画数、読み書き成績など)という3つの次元でとらえようとしているが、まだ結論には至っていない。

16) 参考文献4のp.17に、1980年のIBMの調査結果がある。それによると、姓によく使われる漢字の上位20は、「田・藤・山・野・川・木・井・村・本・中・小・佐・原・大・島・高・松・谷・沢・橋」であり、500に入っていないのは、「藤」「井」「佐」「松」「谷」「沢」である。地名によく使われる漢字の上位20位を見ると、「県・市・町・字・大・郡・京・田・都・山・島・川・知・愛・区・福・府・上・北・東」であり、「郡」「愛」「福」は入っていない。

[参考文献]

1. C.K.Ogden 室勝 訳(1985)『Basic Step by Step』北星堂
2. 林四郎(1971)「語彙調査と基本語彙」『電子計算機による国語研究Ⅲ』国立国語研究所報告39 秀英出版
3. 林四郎(1975)「基本語彙はきめられるか」新・日本語講座1『現代日本語の単語と文字』
4. 海保博之編(1984)『漢字を科学する』有斐閣

5. 海保博之・吉村弓子・岡野雅雄（1985）「漢字の機能度指数開発の試み」『計量国語学』第15巻第1号
6. 学習研究社（1982）『あたらしい漢字用法辞典 A New Dictionary of Kanji Usage』
7. 加納千恵子・藤田正春・阿部直美・ダバロス田中都紀代（1985）『997語で読める日本語』北星堂
8. 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子（1987）『基本漢字の練習Ⅰ・Ⅱ』筑波大学留学生教育センター
9. 国際交流基金（1983）『日本語教科書ガイド』北星堂
10. 国立国語研究所（1982）『日本語基本語彙七種比較対照表』日本語教育指導参考書9
11. 国立国語研究所（1984）『語彙の研究と教育（上・下）』日本語教育指導参考書12
12. 日本語教育学会編（1982）『日本語教育事典』大修館
13. 武部良明（1986）「日本語教育と漢字」『日本語学』6月号 明治書院

（本研究は、昭和62年度筑波大学学内プロジェクト研究からの援助に基づくものである。）

〔参考資料1〕基本漢字500字

(1) 漢字の成立ちを教えるための漢字 63字

日 月 火 水 木 金 土 山 川 田 目 口 耳 手 足 人 女 子 車 門
魚 鳥 馬 牛 貝 米 糸 竹 石 雨 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
上 下 中 大 小 本 力 円 半 主 明 休 体 好 男 林 森 間 開 東
分 岩 畑

(2) 部首となる漢字 8字

言 (糸)(木)(土)(金)(月)(日)(女)(石)(馬)(火)(車) 方 (牛) 反 (力) 欠 寺 青 見
(口)(竹)(雨) 心 (貝)(門)

(3) 基礎語彙となる漢字 236字

a. 動詞 104字

行 来 帰 動 進 止 入 出 乗 降 着 向 歩 走 通 渡 泳 飛 起 寝
立 座 働 (休) 遊 食 飲 (見)(聞) 話 読 書 作 脱 押 引 持 投 打 置
取 使 払 洗 歌 送 受 教 習 貸 借 返 売 買 開 閉 始 終 焼 折
切 割 (分) 消 回 曲 並 集 合 変 代 建 残 続 落 流 (上)(下) 思 考
知 感 覚 忘 選 調 比 決 願 (言) 答 伝 笑 泣 喜 悲 驚 困 疲 住
泊 急 過 違 晴 数 会 別 待 訪 呼

b. 形容詞 66字

(大)(小) 多 少 高 低 安 新 古 美 (明) 暗 重 軽 長 短 太 細 広 狭
強 弱 近 遠 良 悪 速 早 遅 正 熱 冷 暑 寒 暖 温 涼 若 忙 難
楽 苦 (悲) 痛 眠 白 黒 赤 (青) 深
(好) 静 元 気 有 名 親 (切) 便 利 必 要 適 当 簡 単 無 理 得 意
(残) 念 自 由

c. 名詞 66字

私 彼 友 客 父 母 兄 弟 姉 妹 夫 妻 頭 顔 (目)(耳)(口) 歯 (手)(足)
指 朝 昼 晩 夜 夕 春 夏 秋 冬 (雨) 雪 風 雲 空 右 左 (上)(下)(中)
外 前 後 横 奥 次 (東) 西 南 北 国 家 宅 店 駅 橋 道 海 島 窓
形 色 音 点 (魚) 肉 飯 (水) 茶 酒 油 薬 品 物 紙 花 服 何

(4) 使用範囲・造語力による漢字 193字

a. 接辞 48字

先 今 毎 全 最 第 非 不 両 以 時 曜 週 年 百 千 万 度 台 個
番 号 階 位 課 語 屋 室 所 館 局 員 者 業 的 性 化 用 機 線
県 府 都 市 区 町 村 様

b. 熟語名詞 93字

京 学 校 社 銀 工 場 図 公 園 地 鉄 病 院 部 計 荷 生 留 医
記 族 老 写 真 映 雜 誌 術 組 仕 事 英 育 經 濟 政 治 歷 史
科 交 故 路 信 特 港 試 験 面 接 問 題 類 資 格 結 果 論 文
野 法 宿 字 辞 画 味 情 報 関 制 議 産 商 農 費 原 直 初 効
和 式 洋 々 民 共 同 平 価 天 午 具 器

c. スル動詞 52字

料 旅 運 転 案 内 予 約 活 勉 練 研 究 告 説 表 現 実 準 備
質 相 談 座 卒 増 加 減 較 対 賛 成 定 発 到 連 絡 移 放 注
配 電 退 期 求 失 礼 設 完 営 婚 離

〔参考資料2〕 教育漢字996字との比較

- 1) 第1学年配当漢字(76字)中、基本漢字に入っているものは73字、入っていないものは以下の3字である。

王 犬 虫

- 2) 第2学年配当漢字(145字)中、基本漢字に入っているものは125字、入っていないものは以下の20字である。

絵 汽 玉 戸 光 黄 谷 才 算 首 声 星 船 草 池 刀 麦 鳴 毛 里

以下、各学年配当漢字に入っている数を記す。

- 3) 第3学年配当漢字(195字)中、138字
4) 第4学年配当漢字(195字)中、79字
5) 第5学年配当漢字(195字)中、37字
6) 第6学年配当漢字(190字)中、25字

第1学年～第3学年までの416字について見ると、約80%をカバーしていることになる。

なお、基本漢字500字のうち、教育漢字外のものは、以下の23字である。

彼 奥 払 押 泊 渡 脱 寝 眠 疲 驚 並 違 忙 涼 狭 遅 離 婚 較
到 絡 々